エネルギー意識・実態調査に見る 夏季の節電・ガスの節約に関する意識と行動

久米村 秀明、木村 康代、笹岡 恵梨、三神 彩子
東京ガス株式会社　都市生活研究所

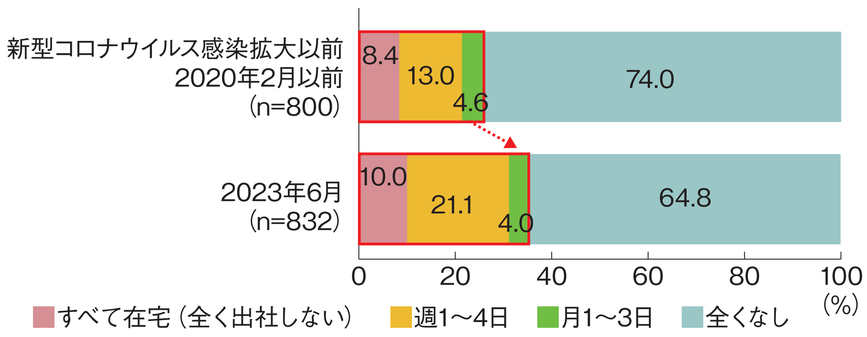
都市生活研究所

目的

新型コロナウイルスのまん延により、リモートワークなど働き方が変化し在宅時間が増加したことや、ウクライナ情勢などによるエネルギー価格高騰に伴い、エネルギー節約意識の高まりがみられる。特に、エアコンは夏季の電力消費量の3割以上を占めるものの、熱中症対策の観点からも適切な使用が求められている。

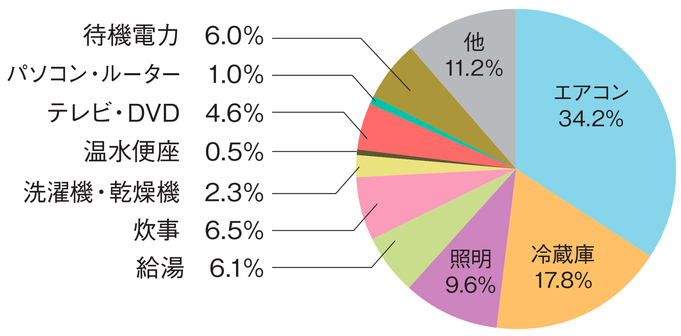
そこで、本研究では東京ガス都市生活研究所が2012年より実施している「エネルギー意識・実態調査」を基に、夏季の節電・ガスの節約に関する意識と行動がどのように変化してきているのか、またエアコンの使い方について変化があるかどうかについて明らかにすることとした。

リモートワークの頻度



<ベース：有職者>2020年4月：n=800、2023年6月：n=832　TULIPWEB調査

電化製品別の電力消費割合



資源エネルギー庁　平成30年度電力需給対策広報調査事業（2021年3月）

方法

- 「エネルギー意識・実態調査」として、エネルギーに対する意識・行動の調査を行った。
- 対象地域は一都三県（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）とした。
- 無作為抽出法を用いて15歳から79歳の男女の1,500名以上のサンプルを選定した。
- インターネットを用いたアンケート調査でデータ収集した。

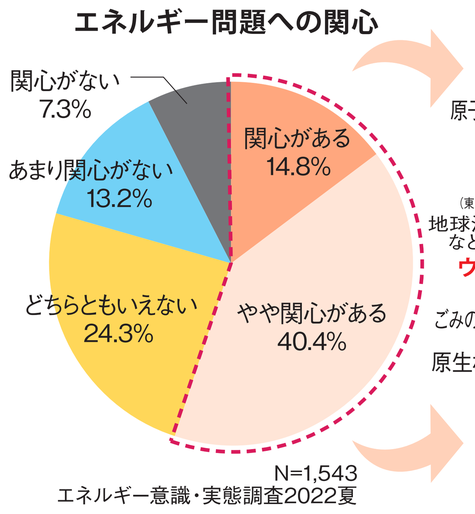
調査名	調査時期	有効サンプル数
エネルギー意識・実態調査2012	2012年9月	3,657
エネルギー意識・実態調査2014	2014年9月	1,535
エネルギー意識・実態調査2016	2016年8月	1,525
エネルギー意識・実態調査2022	2022年8月	1,543

結果

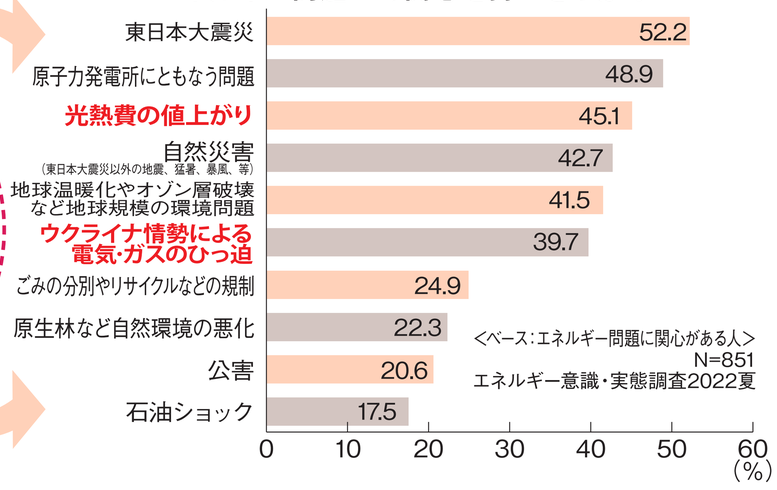
エネルギー問題への関心と関心を持つきっかけ

- エネルギー問題への関心は、「関心がある」と「やや関心がある」を合わせて55.2%。
- 関心を持ったきっかけは、「東日本大震災」や「原子力発電所にともなう問題」が上位だが、「光熱費の値上がり」や「ウクライナ情勢による電気・ガスのひっ迫」もあげられている。

エネルギー問題への関心

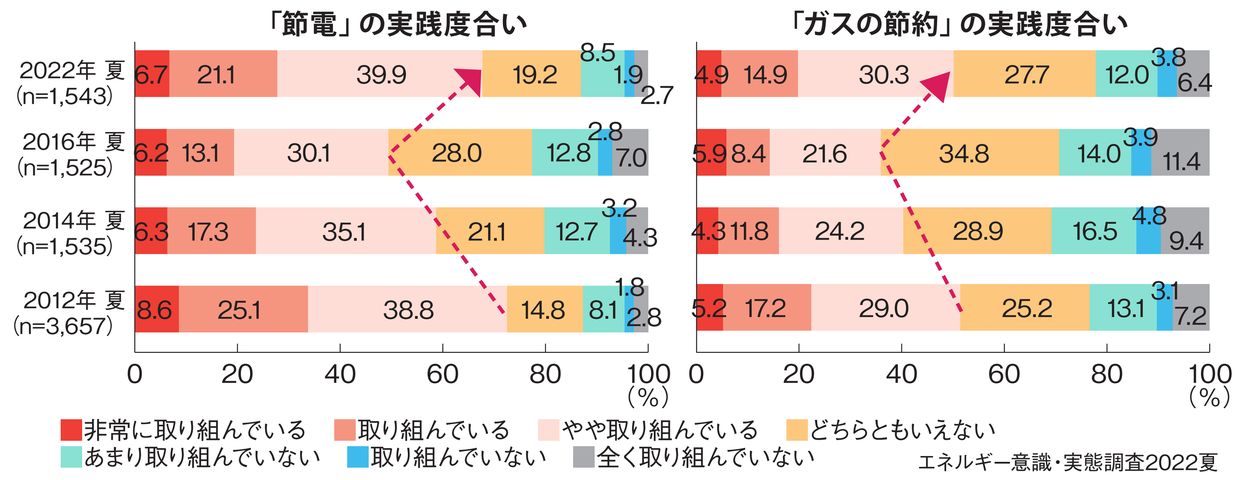


エネルギー問題への関心を持つきっかけ（上位10項目）



エネルギーの節約の実践度合い

- 2022年夏は、節電・ガスの節約に取り組む人が増加。
- 「節電・ガスの節約」に取り組む人が増加し、震災翌年と同水準に。
- 「非常に取り組んでいる」から「やや取り組んでいる」を合計すると、「節電」は7割弱、「ガスの節約」は約5割が取り組む。この割合は、東日本大震災翌年の2012年と同水準だった。

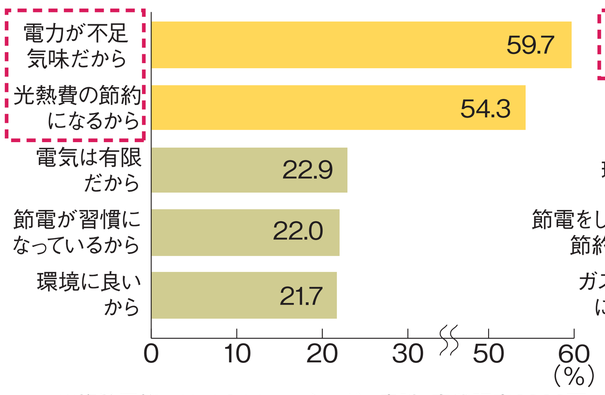


エネルギー意識・実態調査2022夏

節電・ガスの節約に取り組んでいる理由

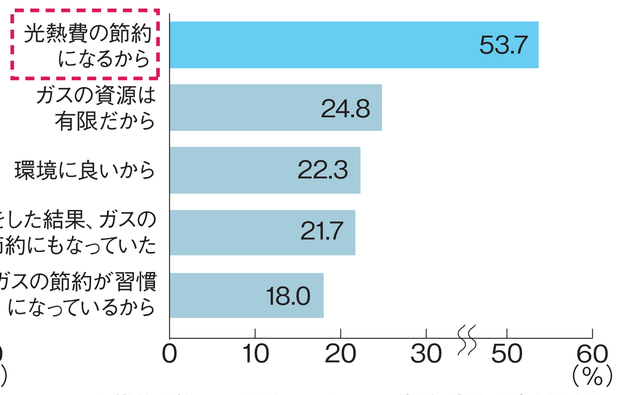
- 節電・ガスの節約に取り組んでいる理由として、電気は「電力が不足気味だから」が1位、ガスの1位と電気の2位は「光熱費節約になるから」だった。
- 2022年夏調査では、電気代・ガス代を「高い」と感じる人が増加したことから、光熱費削減が望まれていた。

「節電」に取り組んでいる理由（上位5項目）



※複数回答　N=1,044　エネルギー意識・実態調査2022夏
<ベース：節電に取り組んでいる人>

「ガスの節約」に取り組んでる理由（上位5項目）

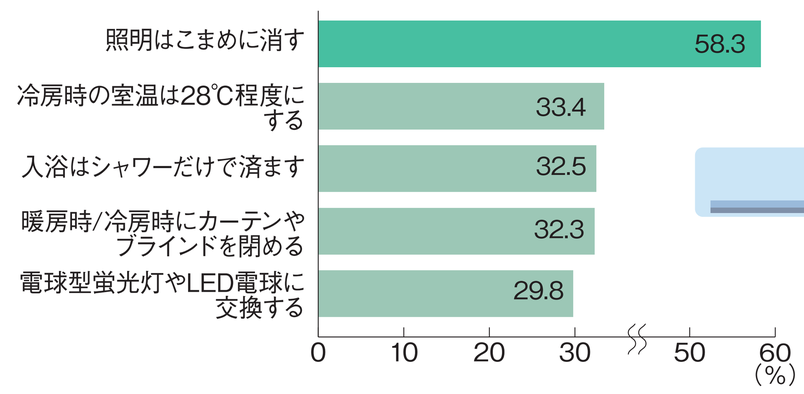


※複数回答　N=773　エネルギー意識・実態調査2022夏
<ベース：ガスの節約に取り組んでいる人>

省エネのために行っていること

- 省エネのために取り組んでいることとして、「照明をこまめに消す」は約6割の人が取り組んでいたが、上位の項目でも実践率は3割程度だった。

「省エネ」に対して現在行っていること（上位5項目）

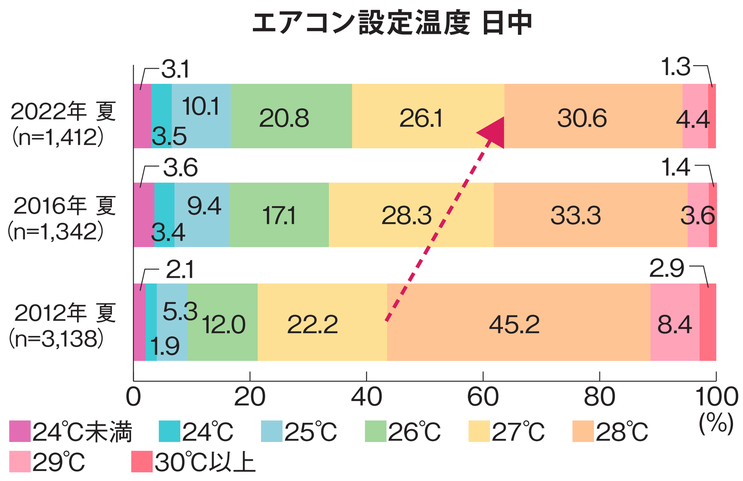


※複数回答　N=1,543　エネルギー意識・実態調査2022夏

冷房使用時のエアコンの設定温度

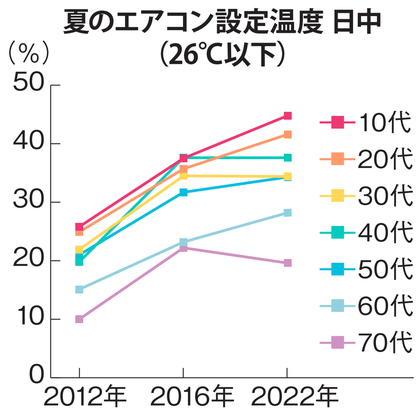
- 2022年夏は、エアコンの設定温度「28℃」が30.6%と一番多く、次に「27℃」の26.1%であった。
- 時系列で見ると、過去の調査より設定温度が低い人が増加している。「28℃」に設定している人は2012年夏の45.2%から2022年夏は30.6%に減少した。一方で「26℃以下」と回答した人は、2012年夏の21.3%から2022年夏は37.5%に増加した。
- 年代別に見ると、年代が低いほど「26℃以下」の割合が高く、60・70代は設定温度を26℃以下にしている割合が30%未満と低かった。10代は40%以上が26℃以下に設定していた。

エアコン設定温度 日中



<ベース：エアコン使用者／温度不明を除く>

夏のエアコン設定温度 日中（26℃以下）

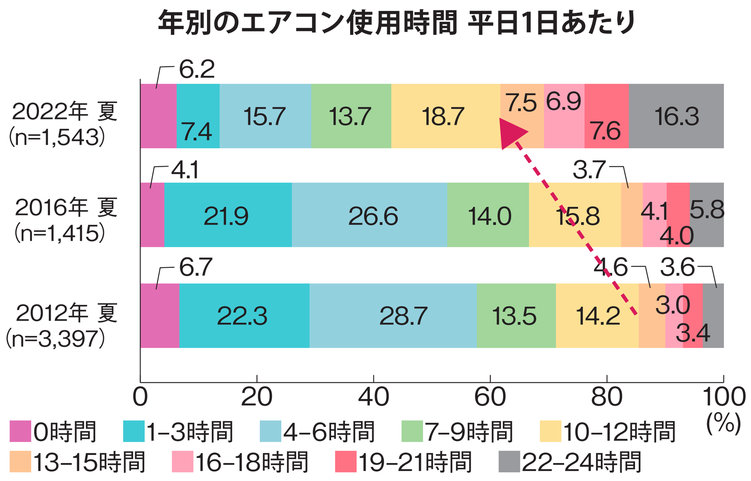


エネルギー意識・実態調査
<ベース：エアコン使用者／温度不明を除く>

平日一日あたりのエアコン使用時間

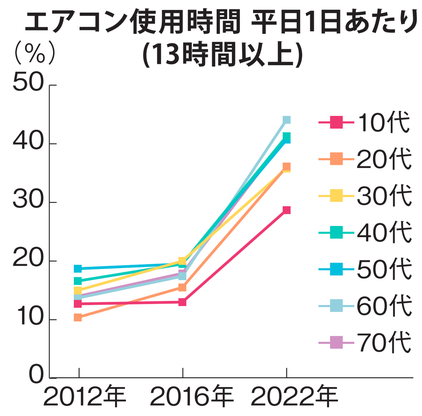
- 2022年夏は、「10～12時間」が18.7%と一番多く、次に「22～24時間」の16.3%と続く。
- 時系列で見ると、2022年夏の「22～24時間」が16.3%と、これまでの5%前後から大きく上昇している。
- 年代別では、年代が上がるほど「13時間以上」のエアコンの使用割合が増えていく傾向にあった。

年別のエアコン使用時間 平日1日あたり



<ベース：エアコン使用者>

エアコン使用時間 平日1日あたり（13時間以上）



エネルギー意識・実態調査
<ベース：エアコン使用者>

まとめ　省エネ意識の高まり

- 2022年夏は、エネルギー問題へ関心がある人は55.2%おり、節電・ガスの節約に取り組む人が東日本大震災翌年の2012年と同水準に増加した。「光熱費の値上がり」や「ウクライナ情勢による電気・ガスのひっ迫」も大きな要因となっていることが示唆された。
- 東日本大震災翌年の2012年以降、節電・ガスの節約の必要性を感じる割合は下がってきていたが、2022年夏は上昇し、2012年と同水準となった。節電は7割弱、ガスの節約は約5割が取り組んでいた。
- 節電・ガスの節約に取り組んでいる理由として、電気は「電力が不足気味だから」が1位、ガスの1位と電気の2位は「光熱費節約になるから」だった。
- 省エネのために取り組んでいることとして、「照明をこまめに消す」は約６割の人が取り組んでいたが、上位の項目でも実践率は３割程度だった。
- 冷房使用時の設定温度は28℃が最も多かったものの、若年層ほど「26℃以下」の低めに設定している割合が高く、60・70代は設定温度を26℃以下にしている割合が30%未満と低かった。10代は40%以上が26℃以下に設定していた。
- 2022年夏はエアコンの長時間使用者が増加し、13時間以上が半数近くとなった。また、高齢層ほど長時間使用者が多く、冷房を比較的高めの温度で切らずに使い続けることで熱中症対策をしている高齢者もいると思われた。

エアコンでできる省エネ行動と年間の省エネ効果

冷房設定温度を少し上げ、うちわや氷で夏を涼しく
夏の冷房時の推奨室温は28℃。扇風機の併用はもちろん、うちわや氷なども活用し、冷房に頼らない涼の取り方も実践してみましょう。
4,114円　107.5kWh　64.5kg

冷房は必要なときだけ
夏でも夜は日中より気温が下がります。夜間の冷房は必要なときだけつけるようにすると省エネです。ただし、熱中症には注意して！
3,675円　96.0kWh　57.6kg

エアコンフィルターは掃除を
エアコンのフィルターを定期的に掃除するだけで目詰まりが解消され、省エネになるだけでなく、エアコンの効きも違ってきます。
1,223円　32.0kWh　19.2kg

※112日（冷房）期間3.6カ月として算出

出典　東京ガス都市生活研究所　ウルトラ省エネブック（2023年1月）

TOKYO GAS
Copyright © 2023 TOKYO GAS Co.,Ltd. All Right Reserved.